

第6節 里山・平地林・里の水辺の再生

第1項 里山・平地林・里の水辺の整備

1 ぐんま緑の県民基金市町村提案型事業(荒廃した里山・平地林の整備) 【林政課】

かつて、きのこや山菜、肥料にする落ち葉や生活用具の材料となる木材や竹など、日々の生活に必要な様々なものを、私たちは身近な里山から得ていました。

また、里山は、二次的自然として、特有の動植物の生息地となることで、生物多様性を保全する機能を担っていました。

しかし近代化が進み、電気やガスが普及し、食材や道具類はいつでも簡単に手に入る時代となった今、たとえ人家裏の雑木林や里山であっても非常に遠い存在となっています。

人の手が入らなくなった里山は、ヤブや竹、シノが繁茂し、さらに人を寄せ付けなくなります。

このような荒廃した里山は、イノシシなどの野生動物の隠れ場となり、近隣の畑や果樹園における農作物被害を拡大させています。

また、ヤブだらけの里山は、ごみが投棄されやすく、さらに見通しが悪いと防犯上の問題も起きやすくなります。

里山の保全是、生物多様性だけでなく、地域の安全・安心な生活環境を維持するためにも重要な課題です。

このため、これらの地域では、2014(平成26)年度から始まった「ぐんま緑の県民基金市町村提案型事業」の「荒廃した里山・平地林の整備」事業を活用し、地域住民と市町村が連携し、身近な里山や竹林の整備に取り組んでいます。

表2-3-6-1 事業の実施状況

実績	年度	H30	R元	R2	R3	R4
市町村数		27	27	27	27	26
箇所数		250	274	294	338	342



ぐんま緑の県民基金市町村提案型事業「荒廃した里山・平地林の整備」で整備した里山

2 多々良沼公園における自然再生活動の推進 【都市整備課】

多々良沼及び城沼周辺において、沼に流入する河川の水質等の改善や絶滅種の復活及び減少しつつある希少種の復活を目指し、失われてしまった自然の再生・保全に向けて、2010(平成22)年4月に地域住民、NPO、学識経験者、地方公共団体、関係行政機関など多様な主体により「多々良沼・城沼自然再生協議会」を設立しました。

2011(平成23)年5月には、協議会の目標となる全体構想を策定し、「水質」「生態系」「親水性」の目標を掲げました。2014(平成26)年1月には、

目標達成に向け、それぞれの主体が取り組みやすいよう、協議会としての実施計画を策定し、その後は実施計画に基づき、それぞれの目標に沿った様々な事業を展開しています。

2022(令和4)年度は、多々良沼においてヨシ焼きを行いました。枯れたヨシを焼くことは、春に多くの植物に対して芽生えの機会を与え、豊かな湿地環境の保全につながります。ヨシ焼きに先立ち、「多々良沼自然公園を愛する会」の主催で、「多々良沼・城沼自然再生協議会」の各構成団体

や地元の皆さん約80名の御協力により、延焼防止のためのヨシ刈りを実施しました。ヨシ焼きについては、昼頃には無事終了し、対岸を見渡せる広大な光景が眼前に広がりました。

ほかには、植物・水質等のモニタリング調査を例年どおり実施し、外来種駆除にも取り組みました。

これからも、一人でも多くの参加者とともに、自然再生に向けた取組を積極的に進めてまいります。



多々良沼ヨシ焼きの様子

コラム 広葉樹材活用推進の取組

群馬県は、県土面積の3分の2を森林が占める関東一の森林県です。群馬県の森林蓄積量のうち、約7割は人工林（針葉樹）で、主に建築用材に用いられています。残りの3割は天然林で、そのほとんどは広葉樹で占められており、十分な資源量があります。

しかし、群馬県産の広葉樹材は十分に活用されておらず、現状・課題として、①素材生産（利用）されず、資源循環が停滞している、②きのこ生産資材として使用されていたコナラ等が、放射性物質の線量の高さから利用できない事例が発生している、③家具製造での利用は外材が大半を占めていたため、県内材の流通体制が不十分である、などが挙げられます。

天然の広葉樹材は、一般的には、大量生産、同一規格が必須の建築用材には向かず、単価は低いとされている一方で、付加価値を高めることにより、新たな販路拡大や高価格での取引が期待されることから、近年、県としても広葉樹材の需要拡大に特に力を入れて取り組んでいます。

これまでの取組の一つとして、県産木材により製作された「ウクレレ」があります。ウクレレの国内唯一の量産メーカーである「三ツ葉楽器」では、これまで一般的にウクレレ製作に適しているとされる外材を使用し製作していましたが、県産木材

を材料に取り入れ、試作を重ねた結果、県産のスギ・ヒノキ（針葉樹）、ヤマザクラ（広葉樹）を用いた製品が品質的に適していることから、2021（令和3）年度から本格的に商品化しています。

これからの取組としては、広葉樹材の新たな価値創造の仕組みづくりによる利用の拡大や、海外市場とも取引できるハイバリューチェーンの構築により、資源の循環を推進していきます。



三ツ葉楽器のウクレレ